

中学校英語における コミュニケーションの継続を目指した授業づくり

— 質問する力の育成を通して —

稲垣久美子¹

一つの話題について会話を続けたり発展させたりすることに所属校の生徒の課題がある。そこで、相手の発話に関連した質問をしてコミュニケーションを続けることを目指した指導法を研究した。疑問文の語順と使用場面を意識した文法指導を行うために1分間チャットを活用した結果、互いに相手の発話に質問を重ねることができるようになった。質問する力の育成はコミュニケーションの継続に有効であることが検証できた。

はじめに

平成20年3月に改訂された学習指導要領における重要な改善事項の一つとして、言語活動の充実が挙げられている。中学校英語においては、実際に英語を使用してコミュニケーションを図ることを念頭に指導の改善が求められている。本研究ではコミュニケーションの継続という視点から言語活動の充実を図ったものである。

研究の内容

1 テーマ設定の理由

(1) これまでの授業の成果と課題

これまでの自分の授業では、ペアやグループでの活動などを取り入れて学び合う活動・伝え合う活動を多く行ったことにより、コミュニケーションへの関心・意欲・態度の育成に一定の成果があった。また、ほとんどの生徒が簡単な英問英答と相づちや聞き返しを使って相手の発話に応答することができていた。

一方、これまでの授業には課題もあった。ほとんどの生徒が与えられた質問に対して1問1答ができていたので、相手の発話に基づいた更なる質問を促したところ、生徒は何を質問していいのか分からないと訴え、強い抵抗感を示した。質問したとしても、単発的な会話に終わっていた。相手の発話に対して疑問詞を単独で使ったり、語順の間違った疑問文で質問していたりしている生徒もいた。このことから、1問1答はできるが、そこから更に質問を重ねて会話を発展させることには課題があると感じた。

(2) 先行研究

ア コミュニケーションの継続の要素と指導の課題

これまでコミュニケーションの継続を目指して生徒

の方略能力（コミュニケーションを進める上で障害が出たときに、それを乗り越えながらコミュニケーションを続けることを可能にする能力）を育成する授業実践は多く行われてきた。しかし、所属校の生徒のように方略能力が育成されてきた生徒が更なるコミュニケーションの継続を目指すためには、方略能力の育成とは別の視点から指導を考える必要がある。

柳井（2003）は、会話を継続する力は問う力（質問する）、答える力（応答する（直接的答え・付加的説明））、応じる力（対応する（相手の発言への対応・コメント））という三つの要素から成り立っていると述べている。このように、コミュニケーションを継続できるようになるためには、方略能力の育成とともに、質問し、応答し、対応する力の育成が必要となる。

また、道面（2009）は会話を継続・発展させることを目指し、中学2年生を対象に「2分間チャット」の実践を行った。道面はチャットの要素としてパートナー（人間関係）、話題（伝えたい内容）、言語力（聞く力・話す力）、会話の続け方・発展のさせ方の四つを挙げている。毎回違う相手と違う話題でチャットを行わせ、生徒自身に会話の続け方・発展のさせ方を気付かせる指導により、会話の継続・発展に一定の成果が上がったとしている。しかし、文構造の誤りなど言語形式についての指導が課題となったと報告しており、文法指導を充実させることが必要であると考えられる。

イ 質問する力

会話を継続するためには、質問し、答え、それに対応することが大切である。その中で、質問をすることはコミュニケーションのきっかけを与え、相手の答えに対応するために更に質問をすることは内容を発展させるための一つの手段となる。そのため、質問する力の育成は、コミュニケーションを継続させるための有効な手立てであると考えられる。

質問する力とは、①相手の発話に対する興味・関心、②相手の発話内容の理解、③状況や文脈を把握し質問することの三つの要素が有機的に結び付いた力のこと

1 横須賀市立大楠中学校

研究分野（言語活動の充実 外国語（英語））

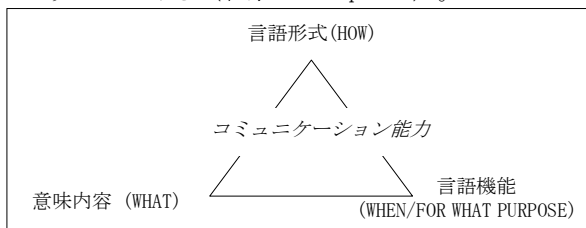
である(齋藤 2003)。また、和田(2009 p.185)は、言葉のやり取りが他者理解を深め、人間関係を構築する役割に着目し、「質問と回答はお互いに理解し合うためのやり取り」(和田 2009 p.185)と述べている。理解し合うためには、お互いに理解し合いたいという意欲を持ち、相手の発話に対する興味や関心を態度に表すことが重要である。

さらに、英語で質問するためには質問の機能を持つ英語表現の文構造を学習し、活用できることが求められる。道面の実践が文構造の誤りなど言語形式について課題が残ったことを踏まえ、質問する力には英語の文構造の理解とコミュニケーションの中でそれを活用する力の育成が必要と考える。

ウ コミュニケーションを支えるものとして捉えた文法指導

従来の文法指導では言語形式のみを重視していて、実際のコミュニケーションの中で活用できないという指摘がある。なぜなら言語発達過程は、文法規則をどれだけ知っているかではなく、コミュニケーションの中でどれだけ使えるかに応じて進んでいくからである(和泉 2009 pp.35-36、村野井 2006)。

言語習得には①言語形式②意味内容③言語機能の三つの要素がある(第1図)。言語形式とは音声・語彙・文法・つづりなど、意味内容とは伝達内容、言語機能とはいつ、どのような場面で何のためにそれを使うかということである(和泉 2009 p.137)。



第1図 言語習得の3要素(和泉 2009 p.137)

コミュニケーション能力とは、この3要素を効果的に結び付ける能力(和泉 2009 p.138)であり、これら3要素の関わり合いを意識した指導が、言語形式の習得を促進する。これは意味重視の言語活動を通して、言語形式にも注意を払う言語教育のアプローチにつながり、新中学校学習指導要領の「コミュニケーションを支えるものとしてとらえた文法指導」と一致する指導理念である。

(3) テーマの設定

以上のことから、本研究のテーマを「中学校英語におけるコミュニケーションの継続を目指した授業づくりー質問する力の育成を通してー」とした。コミュニケーションの継続には、相手の発話の内容に応じて更に質問できるかどうか重要な要素の一つであることから、質問する力の育成を通して生徒のコミュニケーションを継続する力を育む。

本研究におけるコミュニケーションの継続とは、生

徒が相手の発話に沿って会話の内容を発展させ、コミュニケーションを続けることとする。本研究で求める質問する力とは、相手を理解したいという意欲と相手の発話に対する興味や関心を持って相手の発話を聞き、相手の発話に沿ってコミュニケーションの内容を発展させる疑問文を活用できる力とする。

2 検証授業

(1) 検証授業の目的

本研究では、質問する力の育成がコミュニケーションの継続に有効であるかを検証する。生徒は、1問1答はできるが、それ以上会話が続き断片的な内容のコミュニケーションに終始しがちである。このことを踏まえ、相手の発話に関する質問とそれに対する応答ができれば、会話に発展性が生じたと判断する。そこで検証授業では、2問2答を基準としてコミュニケーションが継続したかを検証することとする。

(2) 手立て

質問する力を育成するために、本研究では言語習得の3要素を意識した疑問文の文法指導を行う。すなわち、意味のある言葉のやり取りの中で疑問文を用いて質問する場を設定し、他者理解への意欲を持たせ、疑問文を使用する相手や使用の目的、疑問文の文構造などに意識を向けさせる学習指導を行う。なお、本研究では1年次に学習した疑問文を重点的に指導する。

(3) 検証する方法と内容

事前調査及び事後調査によるコミュニケーションの継続に関する生徒の状況を把握し、その変容を分析する。検証授業では観察、ワークシート、VTR、質問紙調査によって質問する力の育成の状況を把握し、その変容を次の三つの観点で分析し、考察する。

① コミュニケーションの継続

相手の応答に更に質問し、話題に一貫性と発展性のある2問2答以上の会話を続けることができたか。

② 文構造の理解

質問で使われる疑問文の正しい語順について理解が進んだか。

③ 他者理解への意欲

他者に積極的に関わろうとする気持ちやコミュニケーションへの積極的な姿勢が育まれたか。

(4) 検証授業の概要

実施時期 平成22年10月14日～10月28日

対象生徒 横須賀市立大楠中学校
第2学年 90名(3クラス)

使用教科書 Sunshine English Course 2 (開隆堂)

単元名 Program 5 You Look Great!

単元目標 身近なテーマについて、簡単な質問を使って友達と会話を続けることができる

本単元の指導では、まず生徒に自分たちの課題に気付かせた。その後、明らかになった課題を乗り越えさ

せるための学習支援を行った（第1表）。

第1表 単元の指導計画（7時間扱い）

	学習のねらい
第1時	「コミュニケーションの継続」における自分たちの課題に気付かせる
第2時 ～第5時	疑問詞を活用したり、時制を変えたりして質問する
第6時	学んだことを全て活用する
第7時	単元の学習内容を振り返る

検証授業では、授業の前半に質問する力の育成のための活動である1分間チャットを帯学習として行い、後半は教科書を活用して、本文中の疑問文がコミュニケーションの継続にいかに関立っているかを考えさせた（第2表）。

生徒が活動に慣れれば、安心して学習できるようになると考えて、毎時の授業を同じ流れで行った。

第2表 検証授業

ウォーミング・アップ（10分）	挨拶・単語テスト・目標の提示
前半（20分）	1分間チャット ○ペアでテーマに沿って会話する ○最初の質問は “What () do you like?” ()にはテーマが入る 例 sports / food / season 等 相手によって変えてよい
後半（20分）	教科書の本文理解・まとめ

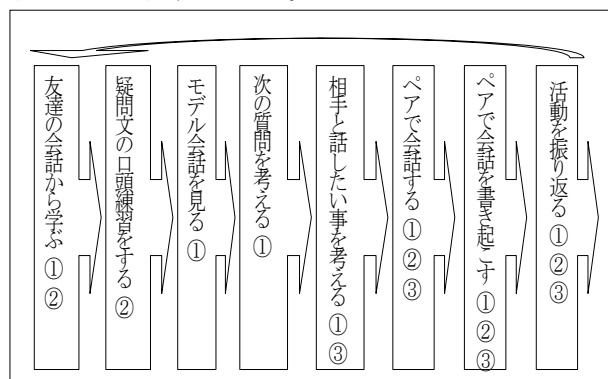
(5) 授業づくりの工夫と生徒の様子

主に①コミュニケーションの継続の仕方を学ぶ（継続）②言語形式を学ぶ（形式）③他者理解への意欲を育む（他者理解）の三つの観点から授業づくりの工夫をした。1分間チャットの指導過程において、①～③の観点に関わる部分を第2図に表した。

継続（①）面の指導は、教師によるモデル会話の提示や実際にペアで会話をする場面などで行った。生徒の言語習得を促進するためには意味のあるインプットを豊富に与えたり、意味のある言葉のやり取りをする機会を設定したりすることが欠かせないからである。

形式（②）面の指導の多くは、継続面を伴って行った。理由は、生徒の言語形式に対する気付きを促進するために意味ある言語使用の機会が欠かせないからである。生徒が疑問文の習得における課題があることを踏まえ、補助教材として既習の疑問文とその日本語訳のリストを配付し、既習の疑問文を毎時間クラス全体や個人で繰り返し口頭練習させた。特に事前調査で生徒が疑問文“What () do you like?”の語順を頻りに間違えていたため、単元全体を通してこの文を1分間チャットの1問目に置き、活用する場面を設定した。なお、頻繁に見られる文構造の間違いについては活動を振り返る場面で一斉指導をしたほか、活動中の机間指導のときに指摘したり、活動後のワークシートを添削したりするなど、指導のタイミングに配慮した。

他者理解（③）の指導は、ペアで会話をしているときだけでなく、その前後にも相手に質問したいことを考える時間を設定するなど、生徒が相手の存在を意識するための指導を行った。



第2図 1分間チャットの流れ

また、他者理解への意欲を育むためには、まず生徒が相手に質問してみたい気持ちになることが重要である。しかし、生徒が自信の欠如から質問することに対する不安感や抵抗感を抱いていることを踏まえ、チャットのテーマを毎回同じにする、モデル会話の次にどのような質問ができるかクラス全体で考える、活動前に準備のための時間を設けるなどの工夫をした。さらに、1分間チャットの中で様々な人とペアを作ると他者理解への意欲がより高まるのではないかと考えた。従ってペアは固定せず、座席が隣り、斜め、前後などの生徒とペアを組むように指示した。

第1時・第2時には多くの生徒が戸惑いや不安を言動に表していたが、第3時以降は多くの生徒が授業の流れに慣れ、本単元のねらいをよく理解し、言語活動に積極的に取り組むことができるようになった。また、ふだんあまり関わることのない生徒同士がペアになることも多く初めは戸惑っていたが、練習をするうちに、ほとんどのペアで会話が続くようになっていった。

3 結果

(1) 生徒の発話量や内容等の変容

第3表は1分間チャットにおける生徒の問答数の変化を示している。第1時には60%以上のペアが1問1答に終始し、相手の答えに対して更に質問して会話を続けることができなかった。しかし、第6時には95%以上のペアが2問2答以上会話を続けることができた。中には13問13答の会話を達成したペアもあった。なお、第1時と第6時は同じペアで活動を行ったが、ペア数が減少しているのは欠席等の理由で活動に参加していない生徒がいたためである。

第3表 1分間チャットにおける問答数の変化

	第1時	第6時
	41 ペア (82 人)	39 ペア (78 人)
2問2答未満 (ペア数)	25	1
2問2答以上 (ペア数)	16	38

問答数の増加に伴い、質問の内容にも変容が見られた。次の会話例に示したペアは生徒A（男子）と生徒B（女子）である。このペアは、第1時に2問1答しか続かなかつたが、第6時には5問5答を達成し、発話量が増加した。第6時の質問を見ると、①好きな動物→②好きな犬の種類→③相手に聞き返す→④犬を飼っているか→⑤相手に聞き返す、のように一つの話題の中で、内容が発展していることが分かる。

第1時 (2問1答)	
A: How did you spend your autumn break? (①)	
B: I played tennis.	
A: Where? (②)	
第6時 (5問5答)	
A: What animal do you like? (①)	
B: I like dog.	
A: What kind of dog do you like? (②)	
B: Because I like Pomeranian. How about you? (③)	
A: I like Minichua Dakkusuhundo. Do you have a dog? (④)	
B: No, I don't. But I have a fish.	
A: Really?	
B: Yes, really. How about you? (⑤)	
A: I have a dog. It kind of a Minichua Dakkusuhundo. Very cute.	
(生徒が会話を書き起こした英文をそのまま記載)	

このように第1時には、2問2答以上の会話を続けることができなかったペアが、上の例のように既習の疑問詞などを活用して一つの話題について質問し合い、会話を続けることができるようになった。また、時制を変化させた質問で内容を発展させることのできたペアは、第1時には41ペア中2ペアであったが、第6時には、39ペア中9ペアと増加した。

第4表は、生徒がワークシートに会話を書き起こした英文やVTRを基に、1分間チャットで使用された疑問文の種類とその数の変容を表したものである。

第4表 1分間チャットで使用された疑問文の変容

	第1時 41ペア(82人)		第6時 39ペア(78人)	
	文の 数	割合 (%)	文の 数	割合 (%)
疑問文の総数	100		210	
疑問詞を活用した疑問文(正しい語順)	66	66	153	73
(疑問詞単独)	14	14	16	8
(間違った語順)	8	8	10	5
時制の変化の疑問文	3	3	11	5
一般動詞・be動詞の疑問文	9	9	20	9

第1時には、多くの生徒は1問1答に終始し、相手の答えに更に質問することができなかった。正しい語

順の疑問文が66%を占めているが、それは教師が提示した1問目の質問を生徒が正しく発話したからである。

第6時には、第1時の2倍以上の疑問文が使用されている。これは一つのペアを除いて全てのペアが2問2答以上を達成したからである。また、疑問詞を活用した疑問文のうち語順の正しい文が70%以上を占めている。生徒は会話の第2問目に疑問詞を用いて、“Why do you like it?” “What kind of () do you like?” “Who is your favorite ()?”などの質問をしており、理由を尋ねる、詳しく説明を求めるなどの場面に適した疑問文を正しい語順で活用できるようになった。特に事前調査で間違いが多く見られた疑問文 “What () do you like?”は、第6時には全てのペアが正しく発話し、活用できた。

1分間チャットの活動中、第1時には、他者と積極的に関わろうとする気持ちよりも、質問して会話を続けることへの抵抗感を強く表す生徒が多かった。また、60%以上のペアで質問する役と答える役がうまく交代できず、役割が固定した一方的な会話となっていた。第6時には、90%以上のペアで質問する役と答える役の交代がスムーズに行われていた。

(2) 質問紙調査の結果

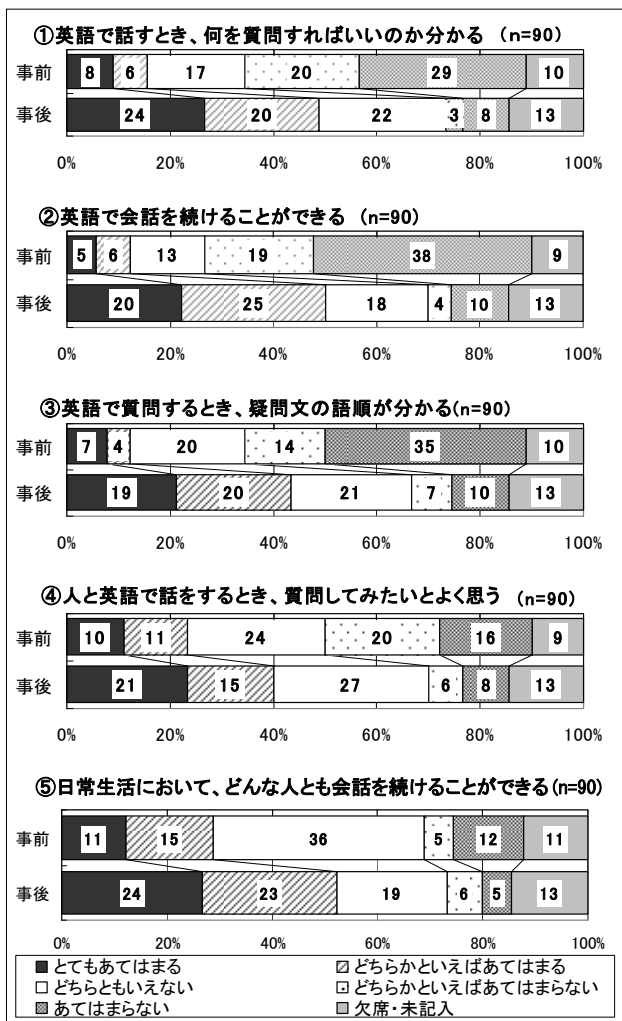
事前事後に質問紙調査と記述式調査を行った。質問紙調査は事前事後ともに12項目の調査を実施した。第3図は結果の抜粋である。グラフ中の数字は人数を表している。

グラフ①と②からコミュニケーションの継続について生徒の意識が変化したことが分かった。グラフ①「何を質問すればいいのかわかる」に肯定的な回答は16%だったが、事後調査では49%に増加した。またグラフ②「英語で会話を続けることができる」に肯定的な回答は12%だったが、事後調査では50%に増加した。

グラフ③からは、疑問文の正しい語順に対する生徒の意識が変化したことが分かる。「疑問文の語順が分かる」に肯定的な回答は12%であったが、事後調査では43%に増加した。

グラフ④と⑤からは、生徒のコミュニケーションに対する積極的な姿勢が育まれたことが分かる。グラフ④「人と英語で話をするとき、質問したいとよく思う」に肯定的な回答は23%だったが、事後調査では40%に増加した。また、グラフ⑤「日常生活において、どんな人とも会話を続けることができる」に肯定的な回答が29%だったが、事後調査では52%に増加した。

なお、質問紙調査の英語の授業に関する質問項目(第3図①②③④)と日常生活に関する質問項目(第3図⑤)について、事前事後調査における平均値の差を有意水準5%でt検定により検討した結果、全ての項目で有意差が認められた。このことから質問する力の育成がコミュニケーションの継続にとって有効であったと確認できた。



第3図 質問紙調査の結果

(3) 記述式調査の結果

事後調査で「授業を受けてできるようになったこと」を記述させた。その内容から英語で会話を続けることに対する生徒の意識が変化していることが分かった。「1分間に質問する回数が増えた」「一つの話から、話を続けられるようになった」「英語で会話を長く続けるのは大変だったけどたのしくできた!」などの記述からは、生徒は多くの質問をし合いながら一つの話について会話を楽しく続けることができたことが読み取れる。また、「『あなたはどうか?』『いつから?』『なんで?』とか、色々なことが聞けるようになった」などの記述があったことから、既習の疑問詞などを活用して様々な質問をし合えたことが読み取れる。

事後調査の「もっとできるようになりたいこと」についての記述からは、文構造の理解に対する生徒の意識が変化していることが分かった。「文の構成、どう話したらはっきり伝わるかが分かった」や「文の語順をもっと正しく言えるようになりたい」などの記述があった。このことから文構造の理解が進んだだけでなく、相手に自分の思いや考えを伝えるためには正しい文構造の理解が重要であるということに気付いたことが読み取れる。

事前事後調査の「友達と会話を続けるために大切なことは何か」の記述から、生徒の他者理解に対する意識が変化していることが分かった。事前調査では、復習などの勉強に関する内容、単語や英文の暗記など言語形式に言及した内容や頑張ることなどの意気込みを記入する生徒が多かった。しかし、事後調査では記述内容が、言語形式に関するものよりも、質問する、相手の話を聞く、互いに楽しむ、反応を返すなど、相手を意識したコミュニケーションに関するものが増えた。

(4) 英語で会話を続けることに苦手意識がある生徒の変容

質問紙調査の「英語で会話を続けることができる」という項目において、事前事後調査のいずれも「あてはまらない」と否定的な回答をした生徒が90名中9名いた。しかし、これらの生徒全てが、第6時の1分間チャットでは、ペアと協力して2問2答以上を達成している。また、補助教材を活用しながら、正しい語順の疑問文で質問し合い、チャットを行っていた。ワークシートにも、「質問できるようになった」「疑問詞の活用ができるようになった」「相手のことを考えて質問することが大切だ」などの記述があり、相手の発話に対して質問できたことが読み取れる。このことから、質問紙調査の回答に変化が見られなかった生徒も、コミュニケーションへの関心や意欲が高まり、正しい語順の疑問文で質問して、ペアとの会話が継続できるようになったと言える。

しかし、「もっと間を開けずに話したい」「もっと質問できるようになりたい」などの記述もあったことから、検証授業を通して学習意欲が高まった結果質問できるようになったが、新たに目標が高まり現状に満足していない生徒がいたことも分かった。このことから、ペアとの会話が続くようになったが、その自信が高まるまでには至らなかったと考えられる。

(5) 考察

A コミュニケーションの継続ができたか

質問する力の育成を行った結果、1分間チャットの間答数が増加した。また、質問内容の多様化が進み、相手の発話に沿って内容を発展させる疑問文の活用が十分に行われるようになった。教師によるモデル会話や友達の良い質問例などの豊富なインプットが、生徒に何を質問すればよいかを理解させる上で効果があったと考えられる。既習の疑問文を相手や質問の目的に応じて使用すれば、会話が続くことを生徒は体験することができた。また会話を続けることに対して達成感を味わい、次第に自信を付けていったことが意識の変容に結び付いたと考えられる。

I 文構造の理解が進んだか

質問する力の育成を行った結果、1分間チャットにおいて正しい文構造による疑問文の発話が増加した。疑問詞の活用など既習事項を繰り返して指導し定着を

図ったことが、文構造の理解を促した。また、コミュニケーションを支えるものとして捉えた文法指導を行った結果、言語形式に対する気付きが生まれ、生徒の言語習得を促進したと考えられる。さらに、相手に自分の思いや考えを伝えるために正しい文構造の理解が大切だという意識が生まれた。これは、言語形式のみを学習すれば会話が続けられると考えていた生徒が、疑問文の文構造を知っていたがコミュニケーションの中で使えなかったというつまづきを体験したからだと考えられる。

ウ 他者理解への意欲が育まれたか

質問する力の育成を行った結果、他者に積極的に関わろうとする気持ちやコミュニケーションへの積極的な姿勢が育まれた。これは、活動前に相手に聞きたい質問を考える、実際に相手と言葉のやり取りを交わす、活動を振り返るなど1分間チャットの指導過程において、相手を意識した指導を絶えず行ったことにより効果が現れたと考えられる。

エ 三つの検証内容の相関

第5表は事前事後の質問紙調査の「英語で会話ができる」という項目とその他の項目の相関係数を表したものである。

第5表 「英語で会話ができる」と
その他の項目の相関係数

英語の授業に関する質問	事前	事後
①英語で話すとき、何を質問すればいいのかわかる	0.17	0.80
②英語で質問するとき、疑問文の語順が分かる	0.18	0.78
③英語で話を聞くとき、相手の言っていることがよく分からなくても、あきらめずに最後まで聞こうとする	0.51	0.84
④英語で話すとき、なんとか相手に伝わるように話そうと努力している	0.50	0.80
日常生活に関する質問	事前	事後
⑤仲の良い友達と話すのは楽しい	0.17	0.46
⑥クラスのいろいろな人と話すのは楽しい	0.26	0.58
⑦人と話をするとき、質問してみたいとよく思う	0.38	0.57
⑧どんな人とも会話を続けることができる	0.45	0.57

事前調査と事後調査を比較すると、英語の授業に関するどの項目においても相関が高まっている。①と相関が高まったことから、コミュニケーションの継続の仕方を学ぶと、意味内容と言語機能を言語活動の中で理解するようになると考えられる。②と相関が高まったことから、疑問文の言語形式に関する指導も重要であると考えられる。また、③や④と相関が高まったことから、質問する力の育成を通してコミュニケーションの継続を目指すことは、コミュニケーションへの積極的な姿勢の育成につながると考えられる。

さらに、日常生活に関する項目(⑤⑥⑦⑧)と「英語で会話ができる」の関係を見ても、事前よりも事後のほうが相関が高まっており、英語の授業で学んだことと生徒の日常生活におけるコミュニケ

ーションへの関心や意欲に結び付きがあると言える。

4 成果と課題

検証授業の結果から、質問する力の育成はコミュニケーションの継続において有効であることが明らかになった。さらに、英語の授業で学んだことの一部が日常のコミュニケーションに転化したことも分かった。

一方、質問する力の育成を中学校3年間を見通した指導にするためには課題もある。

第一に、答える力・応じる力の育成である。会話の中で質問できるようになると、相手に伝わるように答えたい、自分の考えを話したいという欲求が高まってくるのは自然なことである。質問する力と答える力・応じる力をコミュニケーション活動の中でバランスよく育成することが大切である。

第二に、中学校3年間を見通した系統的な指導計画の作成である。例えば、チャットを3年間継続した授業の帯活動として取り入れ指導する。1年生で様々な疑問文を学び、1問1答に一文付け加えること、2年生では、2問2答以上、3年生では、まとまりのある英文を聞いたり、読んだりした後、意見や感想を話し合うことを目標にして指導計画を立てることが考えられる。

おわりに

本研究における質問する力の育成は、英語で会話を続ける力を高めただけでなく、日常のコミュニケーションに対する意識にも転化したことが確認できた。これは、授業でコミュニケーションの学び直しを促進したためと考えられる。成果と課題を、これから出会う生徒との授業づくりに役立てたい。

引用文献

和泉伸一 2009 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店
和田秀樹 2009 『「質問力」で勝つ!』新講社

参考文献

文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂
齋藤孝 2003 『質問力 話し上手はここがちがう』筑摩書房 pp.12-25
道面和枝 2009 『中2で楽しく会話が続く! 「2分間チャット」指導の基礎・基本』明治図書 pp.9-10
村野井仁 2006 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店 pp.93-94
柳井智彦 2003 「応用力を鍛える」(太田洋・柳井智彦『“英語で会話”を楽しむ中学生 会話の継続を実現するKCGメソッド』) 明治図書 p.128